様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２５３７

研究課題名（和文）仏作家によるスタンダール作品の解釈に関する研究

研究課題名（英文）Study on the interpretation of Stendhal's works by French writers

研究代表者
高木　信宏（TAKAKI, Nobuhiro）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：２０２４３８６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，フランスの作家スタンダールの作品が，同時代や後世の仏作家にどのように解釈され，受容されたのかという問題を検討する試みである。ポール・ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』，バルザックと『パルムの僧院』という各々の事例において，スタンダール作品の読書が印象や論評といった一過性の経験や仕事として完結したのではなく，実生活での恋愛経験の深化，あるいは新たな創作の端緒となるような，いわば創造的な受容となった事実を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
スタンダールの作品に対する仏作家の解釈を考察する場合，先行研究においては，前者の価値観や美学に照らして他の作家たちの解釈を批判的・一面的に論じる傾向が顕著であった。しかしながら本研究は，バルザックやヴァレリーの事例において，作品の受容と解釈が創造的な活動にどのように影響したのかを実証的に明らかにし，スタンダールだけでなく，バルザックやヴァレリーの文学的な特徴をも相照らす知見をえることができた。このような作品解釈のための新しいアプローチの提出という点において，本研究の学術的な意義は決して小さくないと考える。

研究成果の概要（英文）：This research is an attempt to examine the problem of how Stendhal's work was interpreted and accepted by contemporary and later French writers. I tried to clarify the relationship between Paul Valery and "Lucien Leuwen", Balzac and "The Charterhouse of Parma". In each case, I revealed the fact that reading of Stendhal's work did not complete as a temporary experience or work such as impression or critical commentary, but deepened the romance experience in real life or became the beginning of a new creation, in other words, creative acceptance.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：外国文学　フランス文学　スタンダール　文学作品の受容　作家による批評

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

⑴　科研費プロジェクト「スタンダールの死後出版作品集における異文研究」において『パルムの僧院』に関するバルザックの論考「ベール氏論」とそれに対するスタンダールの反応を考証するなかで，ヴィクトル・デル・リットをはじめとする専門研究者の議論がバルザックによる不十分な作品理解という側面ばかりを強調することに自足しているのではないかという疑念を抱いた。バルザックがものした批評は，両作家の文学観や手法の相違を探り，資質や方法論の特徴をそれぞれ照らし出す考察の足がかりとなりうるにもかかわらず，先行研究ではこの問題が掘り下げられてこなかった。

⑵　上記の研究と併行して，国際高等研究所の研究プロジェクト「受容から創造へ――日本近現代文学におけるスタンダールの場合」に参加し，小林秀雄の「モオツァルト」をとりあげて考察した際に，小林のスタンダール観にポール・ヴァレリーの批評の影響を確認したことも本研究の端緒となっている。その論考とは，シャンピオン版『スタンダール全集』に収録された『リュシアン・ルーヴェン』への序文であり，作家のパーソナリティの謎に迫る，きわめて示唆に富むテクストなのだが，しかし管見するところ今日までヴァレリーの序文は正面から論じられてはいない。しかも，小説嫌いで知られる詩人がなぜスタンダールの小説に我を忘れて没入するほど魅了されたのかという興味深い問題も研究者によって未着手のままであった。

⑶　さらに，20 世紀前半のフランスに出現した「Stendhalisme スタンダール主義」という文学史的な現象に関する考証を進めるなかで，シャンピオン版全集が作家の信奉者の拡大に果たした役割はとりわけ注目されるところであるが，そうであるだけに同全集に序文を寄せたヴァレリーやアンドレ・ジッドといった文学者たちの批評文が発した影響力は，受容史的な観点からも検討に値する。ひとりの作家の創造世界を構成する価値観ないしは美学や倫理に照らして，同時代や後世の文学者による批評の当否を判断するのではなく，これらをアリアドネの糸として両者の本質的な相同や差異を相照らすような，従来とは異なる新たな作品解釈の方法を探る必要を強く覚えたことが，本研究の学術的な背景を成している。

２．研究の目的

19 世紀フランスの作家スタンダールは，長編小説『赤と黒』や『パルムの僧院』によって文学史上に確固たる地歩を占めているが，その声望は生前から高かったわけではない。『パルムの僧院』に関するバルザックの長大な評論や 20 世紀のポール・ヴァレリーがものした本格的な批評がこの小説家に対する今日の高い評価に少なからず与ったことは確かであろう。しかしながら，バルザックらの評論に向けられる専門研究者の考察は，作家たちがスタンダール的な価値や特徴をどこまで理解しているのかという一面的な見方に立ち，彼らの解釈を批判的に問う傾向がある。本研究では，文学者たちによる論考を再検討することで，作品解釈のための新たな方法を模索すると同時に，それぞれの文学的な特徴をも相照らす視座を導き出すことを目的とした。

３．研究の方法

⑴　本研究では先行研究の批判的検討にもとづき，申請者がこれまでの科研プロジェクトの研究によって得た知見と方法を活かしつつ，バルザックとヴァレリーによるスタンダールとその作品を対象とする論考を，それぞれの執筆時の歴史的・社会的背景や知的交友に関する考証を踏まえながら，実証的に再検討することを主眼とする。したがって，評論そのものの読解だけでは事足りず，関連する一次資料の調査と分析に多くの時間と労力が割かれることになる。

⑵　ポール・ヴァレリーの論考「スタンダールについて」を対象とする考察では，この批評テクストの解釈そのものに終始するのではなく，今日の校訂版に比してきわめて恣意的で杜撰に編まれたミティ版テクストの把握を考察の出発点とし，論考執筆の原動力となった原体験の意味を書簡や日記等の分析に拠りながら析出した。

⑶　バルザックによる受容についての考察では，従来考察の中心を成してきた「ベール氏論」ではなく，『パルムの僧院』出版当時の両作家の関係を考証し，1839 年 4 月 11 日のイタリアン大通りでの両作家の邂逅と状況を再検討し，バルザックが小説『ピエレット』の着想にいたった経緯と『パルムの僧院』との関係を検証した。

４．研究成果

⑴　ポール・ヴァレリーによるスタンダール受容に関する研究では，まず小説という文学形式に対して否定的な見解をもつヴァレリーが，なぜ後者の長編小説『リュシアン・ルーヴェン』だけは例外的にも終生愛読したのかという問いを出発点として，〈ナルシス〉という神話的形象によって象徴される詩人の文学的な営為においてその読書が有した意味を明らかにした。小説の描き出す恋愛と自分自身の感情との区別が出来ないほど心を深く動かされてしまったというヴァレリーにあって極めて希有な状態は，まさしくナルシス的な経験と言ってよく，彼の文学

的探究の根幹にかかわる出来事であったと解釈し，その意義を積極的に評価した。
　このように小説の表象する恋愛にヴァレリーが「完全に反響」した背景としては，彼が『カイエ』に残した 1940 年の記述から，青年期に彼が出会ったロヴィラ夫人に対する片思いの恋が深く関与していることが窺い知れ，この恋と読書との関係に焦点を絞って検証を試みた。夫を亡くしたこの年上の貴婦人に対して青年が抱いた恋が，現実に根ざすところの少ない，いわば「想像恋愛」であったことが，先行するヴァレリー研究によって指摘されているが，そうした読書に先立つ「ロヴィラ夫人」という形象が小説の作中人物「シャストレール夫人」のイメージと，ヴァレリーのイマジネールにおいて融合したのではないかという解釈を，ヴァレリー自身が素描した夫人の肖像の分析などを踏まえて提出した。
　また，小説の刊行時期の考証にもとづき，ヴァレリーによる読書の時期を 1894 年 5 月と特定し，それがロヴィラ夫人に対する詩人の恋に変化が生じ始めていた時期と重なっている事実を明らかにしたが，この解明により読書体験の意味をいっそう具体的な文脈において捉えることが可能になったと考える。

⑵　スタンダールと同時代の仏作家オノレ・ド・バルザックの場合，先行研究がもっぱら考察の対象としてきたのは後者の評論「ベール氏論」（1840 年 9 月）であり，彼がスタンダールの『パルムの僧院』（1839 年 3 月）をどのように解釈したのかという問題をめぐって多くの論考が重ねられてきた。しかしながら，それらは総じてスタンダールの文学的価値観や美学に依拠してバルザックの解釈を批判的に検討する傾向があり，理解としては一面的なものと言わざるをえない。しかも従来の研究では『パルムの僧院』の修正にかかわる両作家の関係についての実証的な検証が不充分であり，交流の実相を正しく捉えきれていないことも，バルザックの解釈に対するスタンダール研究者の評価を消極的なものにした一因だと考える。
　以上の問題点を踏まえて我々はまずスタンダールとバルザックの当時の関係を再考証し，「ベール氏論」以外に後者による前者の受容を検討する資料として，バルザックが『パルムの僧院』の読後ほどなくして執筆した小説『ピエレット』（1840 年１月）に着目し，その創作における『パルムの僧院』の読書の影響を考察した。すでにバルザック研究者によって両作品の類似点について興味深い指摘があるものの，執筆の状況や両者の交際の実相に照らしたものではなく，それらの論考は充分に掘り下げられてはいない。我々はフランス学士院が所蔵する『ピエレット』の原稿や校正刷りのほか，メゾン・ド・バルザック所蔵の関連資料にあたり，生成論的な観点からテクストの創作過程の把握を試み，従来にない研究の端緒をえた。
　また，当時の両作家の関係を再考証した結果，『パルムの僧院』の出版からほどない 1839 年 4 月 11 日に偶然実現した二人の邂逅の折り，バルザックはスタンダールに対して賛辞と助言を述べただけでなく，暗号化されたモンチホ姉妹への献辞の意味とその背景，すなわち当時 12 歳だったウージェニーのために書いた草案が小説の源泉となったという秘密をスタンダールから聞き出した蓋然性が高いと分析した。これが機縁となり，バルザックは同年６月初旬に彼としては初めてとなる少女向けの小説『ピエレット』（1840 年１月公表）を着想するに至ったと推定でき，その結果，バルザック研究者が指摘する両小説の類似点が生じた文脈も明らかになったと考える。さらに『ピエレット』の創作過程についても，フランス学士院が所蔵する自筆原稿の検証にもとづいて独自の仮説を立てている。

⑶　研究期間全体を通じて実施した研究の成果として挙げられるのは，ポール・ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』，バルザックと『パルムの僧院』という各々の事例において，スタンダール作品の読書が印象や感想，批評といった一過性の経験や仕事として完結したのではなく，実生活での恋愛のイマジネールな次元での深化，あるいは新たな創作の端緒となるような，いわば〈創造的な受容〉となった事実を突きとめたことである。これにより，スタンダールの価値観や美学に照らしてバルザックやヴァレリーの解釈を批判的・一面的に考察する傾向が顕著な先行研究とは大きく異なる視角を提出し，作家たちがスタンダールの作品と取り結んだ関係の実相を掘り下げて論じることができた。このように彼らの文学におけるスタンダール受容の意味と重要性に新たな光をあてた本研究の意義はけっして小さくないと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Nobuhiro TAKAKI	４．巻 No. 23
２．論文標題 Texte et correction : une remarque sur le caractere de Mme de Renal	５．発行年 2020年
３．雑誌名 HB. Revue internationale d'etudes stendhaliennes	６．最初と最後の頁 155-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙木 信宏	４．巻 無
２．論文標題 バルザックと『パルムの僧院』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Correspondances	６．最初と最後の頁 131-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nobuhiro TAKAKI	４．巻 No. 22
２．論文標題 Mitty, Valery et "Lucien Leuwen"	５．発行年 2018年
３．雑誌名 HB. Revue internationale d'etudes stendhaliennes	６．最初と最後の頁 207-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙木 信宏	４．巻 第37号
２．論文標題 『赤と黒』の校訂とレナール夫人像――解釈と受容の問題――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』	６．最初と最後の頁 133-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nobuhiro TAKAKI	4．巻 No. 21
2．論文標題 Deux Lettres inedites de Stendhal : documents Jean-Jacques Ampere	5．発行年 2017年
3．雑誌名 HB. Revue internationale d'etudes stendhaliennes	6．最初と最後の頁 247-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 髙木 信宏	4．巻 第36号
2．論文標題 ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』――魅惑されたナルシス――	5．発行年 2017年
3．雑誌名 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』	6．最初と最後の頁 183-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 髙木 信宏	4．巻 第35号
2．論文標題 スタンダリスム史関連資料――ジャン・ド・ミティ未刊書簡	5．発行年 2016年
3．雑誌名 九州大学フランス語フランス文学研究会『ステラ』	6．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 髙木 信宏
2．発表標題 『赤と黒』の校訂についての一考察
3．学会等名 日本スタンダール研究会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考